The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「世直し」ノオト（2020 年度・冬）
Author(s)	池田, 光穂; 井上, こう; 岡野, 彩子 他
Citation	Co＊Design. 2021, 10, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/83303
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「世直し」ノオト（2020年度・冬）

池田光穂（大阪大学COデザインセンター）
井上こう（国立民族学博物館）
岡野彩子（大阪大学COデザインセンター）
上條美代子（看護師）
北村敏泰（ジャーナリスト）
熊野以素（日本社会保障法学会）
滝奈々子（京都市立芸術大学芸術資源センター）
額田有美（国立民族学博物館）
日髙悠登（龍谷大学世界仏教文化研究センター）
※所属・肩書は投稿日（2021年1月31日）現在

“Yonaoshi” Note (Winter semester 2020)

Mitsuho Ikeda (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)
Ko Inoue (National Museum of Ethnology)
Ayako Okano (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)
Miyoko Kamijo (Nurse)
Toshihiro Kitamura (Journalist)
Iso Kumano (Japan Association of Social Security Low)
Nanako Taki (Archival Research Center, Kyoto City University of Art)
Yumi Nukada (National Museum of Ethnology)
Yuto Hitaka (Research Center for World Buddhist Cultures, Ryukoku University)

キーワード ―― 世直し、対話、行為、コロナ禍
Keyword ―― Yonaoshi, dialogue, action, coronavirus crisis

「世直し研究会」は、2006年4月から2016年3月まで大阪大学コミュニケーションデザインセンターにおいて開催された「現場力研究会」の後継組織として2018年4月25日に誕生し、通算で201回を数えます。月1回水曜日に大阪大学COデザインセンターで開催され、世の中の理不尽や不条理から目を逸らすことなく、「世」のあるべき姿を問いつつ、具体的な現場での課題に取り組む力を養い、「世直し」へと繋げていくことが目指されています。今回掲載したこの「世直し」ノオト（2020年度・冬）は、研究会に集う大学内外の参加者が、研究会での対話をもとに考えて綴った「ノオト（notes）」の第6弾にあたります。すなわち第26回から第31回までの研究会（2020年8月～2021年1月）における対話から編み出された10編のエッセイになります。

この期間に取り上げたテーマは以下の通りです。

第26回（2020年8月26日）　「戦争と平和」【オンライン開催】
第27回（2020年9月30日）　「世直し」うた会【オンライン開催】
第28回（2020年10月28日　観劇を通して世直しを考える　～くるみざわしん作『同郷同年』～
第29回（2020年11月25日）　世直し研究会メンバーの新著紹介【オンライン開催】
熊野以素『“奇天烈”議会奮闘記―市民派女性市議の8年間―』（東銀座出版社、2020年9月）
北村敏泰『揺らぐいのち―生老病死の現場に寄り添う聖たち―』（晃洋書房、2020年11月）
第30回（2020年12月23日）　「世直し」忘年会～1年の振り返りと新年に向けて思うこと～【オンライン開催】
第31回（2021年1月20日）　「世直し」ノオト（2020年度・冬）合評会【オンライン開催】

※第1回から第25回までの研究会テーマは、Co* Design第6号から第9号に掲載の「世直し」ノオトをご覧ください。

コロナ禍にあって、上記の研究会のほとんどがオンライン開催となりました。「世直し」ノオト（2020年度・夏）では「今、コロナ禍で」というテーマを取り上げましたが、本ノオトもこの状況に鑑みて、対面機会の減少が与える影響や、新たな人との接し方の可能性、今こそ求められる力ある言葉についてなど、コミュニケーションに関わる問いを投げかけたエッセイが多く見られます。

「世直し研究会」と「現場力研究会」については下記URLをご参照ください。

世直し研究会：https://goo.gl/hvkRBz　　現場力研究会：https://goo.gl/cPYDEv

「世直し」ノオトのバックナンバーは下記URLよりご覧いただけます。

「世直し」ノオト（2020年度・夏）：　https://doi.org/10.18910/78965

「世直し」ノオト（2019年度・冬）：　https://doi.org/10.18910/77265

「世直し」ノオト（2019年度・夏）：　https://doi.org/10.18910/75575

「世直し」ノオト（2018年度・冬）：　https://doi.org/10.18910/73009

「世直し」ノオト（2018年度・夏）：　https://doi.org/10.18910/71352

1　前編：コレラの時代の愛

「苦いアーモンドを思わせる匂いがすると、ああ、この恋も報われなかったのだなとつい思ってしまうが、こればかりはどうしようもなかった」。これは、ノーベル文学賞作家ガブリエル・ガルシア=マルケスの作品『コレラの時代の愛』（木村榮一訳）の冒頭の文章だ。匂いを感じたのは81歳になる医師フベナル・ウルビーノ博士であり、亡くなったのはチェスの友人ジェレミーア・ド・サン・タムールである。苦いアーモンドを思わせる匂いとは、失恋の自殺用でのシアン化合物の燻蒸した時のものである。だが、老練な医師のチェスの相手だからジェレミーアは、報われない恋で亡くなったのではない。高齢で戦傷による身障者でもあった彼は高潔で、検視の助手であった若い医学生に故人が「無神論の聖人」に値すると彼の人格を褒めているからである。ウルビーノ博士が、生涯にわたり診てきた検視で苦いアーモンドの匂いがする自殺のケースで、失恋が原因以外なのは、彼の長い医師の経歴のなかでも初めてのケースであったからだ。失恋が命を縮めることもあるが、執念深い片思いが半世紀もたって成就することがある。それがこの『コレラの時代の愛』なのだが、ここからヒントをえた僕は『コロナの時代の愛』について考察しよう（後編を参照）。

さて『コレラの時代の愛』は、コレラが蔓延する20世紀初頭の南米コロンビアのカルタヘナを舞台とする奇妙な老人のラブストーリーが展開する。ジェレミーアの葬儀後に、逃げたペットのオウムを樹上に追いかけて梯子から落下しあっけなく亡くなったウルビーノ医師。その寡婦フェルミーナは、かつて彼女が13歳の時に4歳年上だった貧しい郵便局員フロレンティーノと駆け落ちしたが彼女の父親によってその仲を割かれ、フランス留学帰りのコレラ治療の専門家ウルビーノ医師と結婚させられた経験をもつ。もちろん土地の名士で裕福な二人は幸せな老後の人生を送りつつあった。その葬儀が終わってまもない頃に今は、河川運輸会社の経営をしているそのフロレンティーノが51年後に寡婦になったばかりのフェルミーナのところに登場し、永遠の愛を「再度」誓ってくれと迫る。

小説ではフェルミーナは当然のように激昂する。しかしこれまた異様なことにくだんのフロレンティーノはその純愛の成就を待つ51年の間になんと六百人の女性との恋愛――つまり愛の情交――を楽しんできたのだった。はてさて物語の結末は?! それはみなさんのために取っておこう。

僕（筆者）はいったい何を世直し研究会の諸兄諸姉に伝えたいのか?　それは、このカルタヘナというカリブ海に面した熱帯――コレラは激しい下痢と発熱で命を奪う――における奇矯なラブストーリーが、この時代――コロナは重篤な呼吸器不全と発熱で命を奪う――にもまた新たな社会的想像力の可能性をもつ、と言わんがためであった……（後編に続く）

文献

ガブリエル・ガルシア=マルケス『コレラの時代の愛』木村榮一訳、新潮社、1985年。

（池田光穂）

2　後編：コロナの時代の愛

（承前）人騒がせなことにコレラとコロナの地口（駄洒落）のタイトルは、ある金融系の財団の2025年の大阪・関西万博を見据えた健康問題を考えるセミナー講演のものとして僕が意図的に選んだものだった。ガルシア＝マルケスの小説のコレラの時代は老いらくの恋の奇矯さ――性愛表現もあるが高齢の寡婦がその恋人の入れ歯を洗ってあげたりボタンつけをする情景描写が秀逸に思える――を謳ったが、コロナの時代の愛もその奇矯さにおいてはひけをとらない。三密に代表されるように、一番大切な人と最も距離をとらなければならないからだ。

BBC英国国営放送局が、コロナ流行期の性行為は後背位がいいとか、ベッドの中でもマスクは着用したほうがいいと真面目に報道する始末だ。つまり最愛の人を感染リスクに曝してはならないということだ。妊娠や去勢という難局を乗り越えて聖職の道に復帰してエロスなのかアガペーなのか分からない歴史に残る恋愛を成し遂げたアベラール（1079-1142）とエロイーズ（1100?-1164）の至上の愛よろしく相手を思う気持ちこそが何よりも大切になったのである。使徒パウロのコリント信徒への第一の手紙（13:13）「最も大いなるものは愛である」こそ、コロナの時代にふさわしい文言である。

講演では海外のノーベル賞の向こうを張って日本で歴代3番目の受賞者である川端康成の短編小説『眠れる美女』に登場する江口老人を取りあげる。解説をした三島由紀夫は「形式的完成美を保ちつつ熟れすぎた果実の腐臭に似た芳香を放つデカダンス文学の逸品」とまで絶賛する。三島も言うように、これは若い女性とただ添い寝をするだけという江口老人が、その刺激を受けて自分の過去の性愛経験（ヰタ・セクスアリス）を夢に見るという経験を描写する屈折した純文学である。

コロンビアの老人たちの恋愛と、日本の社会的地位のある老人の妄想愛（イメクラ）にそれぞれあるものとないものがある。前者には性交を含めた情交があり、後者にはそれがない。また前者は男女の具体的な恋愛だが、後者は無意識にまで分け入る抽象的な性愛の世界である。そこから、敷衍して会社の役員や経営者などが多い金融系の講演会で、日本のかつての経済的パワーとはこのような相手のいない観念による一人相撲のような中年～壮年男性の性愛だったのではと（猛省を促すつもりで）投げかけるつもりであった。ダイヴァーシティの時代、若年者も高齢者も男女が平等に社会参画する時代には、ガルシア＝マルケスが描いたコレラ時代の愛こそが我々に「ふさわしいもの」なのだ、と。だがこの講演内容を事前に察知した事務局は、内容が趣旨に「ふさわしくない」という理由で翻意を僕に求めてきた。事務所の趣旨を汲んで無難な内容（実際の映像プランBはhttp://bit.ly/3sbru7x）に差し替えた。

読者の皆さんよ、ご心配ありがとう。だが、ちゃんとHP（http://bit.ly/3fxL092）にその内容（プランA）を掲載し、YouTubeに動画（https://bit.ly/3ngujBR）を掲載してある。ご覧アレ!!

（池田光穂）

3　馴れとは面白きものなり

「魔界転生」や忍法帖シリーズで有名な山田風太郎の『戦中派不戦日記』をパラパラ読んでいたら、コロナ禍のいまの日本と似ている部分があって面白かった。風太郎は1945年当時23歳の医学生で東京在住。徴兵検査は肺浸潤で不合格になっていたと橋本治による同書解説文にある。同書は1945年の丸一年間に書かれた全く文字通りの日記を収めていて、肩がこらない文章なのと、現実認識が醒めているところが面白い。わたしが読んだのはほんのはじめのほうである。

1945年2月17日の記述：**「九時過B29また一機、伊豆に入り山梨に入り東進、さらに南下して相模湾より退去。この両日それぞれ千機を超ゆる空爆を味わいしあとにては、B29の一機二機のごとき屁とも思われず。馴れとは面白きものなり」**。

2021年の1月現在、新型コロナ検査陽性者が東京であっというまに2000人を超えたことには驚いた。けれども、驚いただけで怖いとか緊張を感じるとかはなかった。最近、数字がただごとでなくなればなくなるほどよそごとの感じ方になってしまうのはなぜだろう。

1945年2月10日の記述：**「先日の都心爆撃に於て死者七百、負傷者一万五千なりと。中天に吹っ飛びし者あり、木ッ葉微塵となりし者あり、石に打たれて惨死せし者あり、顔半分打砕かれ、腸ひっちぎれし者あり、白けて石地蔵のごとく転がりて死せり者あり等種々噂しきりなり。語る者も聞く者も『生きて』あれば、ともに笑みつつ語り、また聞く。余もまた然り」**。

2021年の1月現在に限らないが、自戒めいたことを言えば、やっぱり人は人のことをたいして想像しようとしないし、安全地帯からああだこうだ言いたいものなのだ。ただ、安楽な場所と大変な場所はまだらになっている。安楽だと思っているうちにゆでガエルになっていることもある。

1945年1月4日、新聞論調に：**「昨日までは、比島戦は日米戦の天王山なり、断じてルソン米に渡すべからず、との叫び全面を彩りしが、本日より俄然として比島一都邑の得失は二の次なり。否、比島そのものも問題外なり、ただ日本の欲するは米軍の出血、大出血なりとの調子に一変す」**。

2021年の1月現在、この3週間が山場とか正念場とか天王山とか、これまで何度も聞かされてそのたびに結果ははかばかしくなく、なかった話のようにされて、言葉が軽い。

のぼせあがるような勇ましい言葉も困るし、迷走と見ないふりで力が入らない様子も困る。それらに馴れてしまったのだろうか、気づいたらわたしのなかに怒るという心のはたらきが見当たらなくなっていた。これはこわいことだとぼんやりした頭で気づいた。筋道を丁寧に身体にためて、冬こそ「抵抗力」を養いたい。

文献

山田風太郎著『戦中派不戦日記』角川文庫、2010年刊。

（井上こう）

4　誰も置き去りにしない授業

コロナ禍で都市封鎖の措置を余儀なくされた時、ドイツのメルケル首相やイタリアのコンテ首相など欧州諸国のリーダーは明確な対処方針を説明し、国民にこう語りかけた。「誰も置き去りにしない」。これは国連の持続可能な開発目標（SDGs）の誓い＝約束の言葉でもあり、もっとも脆弱な立場の人びとに焦点をあて、「世直し」の目標を定めたものだ。前例のない都市封鎖下における魂の記録『武漢日記』（河出書房新社、2020年）の中で著者の方方（ファンファン）は、「ある国の文明度を測る唯一の基準は、弱者に対して国がどういう態度を取るかだ」と綴っている。今、個人が、地域が、国家が、世界が、あるべき姿を問われている。

未曾有の災厄と真摯に向き合ったこうした力ある言葉は、いわゆる「コロナ疲れ」が出始めていた私の心を揺さぶった。前回の「世直し」ノオト（2020年度・夏）では「はじめてのオンライン授業」（Co* Design 9, 2021年1月）について書いたが、秋学期からは対面授業も部分的に再開し、対面、オンライン、両方を併用する「ハイブリッド」という三様の形式で授業を行うことになった。これにより、準備に加えてふたたび通勤時間が必要となり、慢性的な睡眠不足に陥ってしまった。

心待ちにしていた対面授業では、学生がそこに居てくれることの幸せを、しみじみと思い知った。私の言葉に頷いてくれたりすると、ご褒美をもらった子どものように嬉しくなり、活力が湧いてくるのを実感する。しかし、基礎疾患があるなどさまざまな事情で対面授業に出席できない学生もいる。そうした場合、授業の録画とレジュメ等の教材を配信して自由な時間に受講してもらうオンデマンド形式か、教室で対面授業を進行しつつオンラインで同時に授業を配信する「ハイブリッド」形式での対応となる。私の場合は、100人規模の講義は対面とオンデマンドを組み合わせ、小規模の演習はWeb会議システムMicrosoft Teamsを用いたハイブリッドで授業を行った。

オンデマンド形式では双方向性を持たせるため、授業毎に課題を設けて学生にメールで連絡する。事情はわからないが、しかし返信がないこともある。そこで、せめてもっと魅力ある授業にできないかと、自分でも授業録画を視聴し、話し方やパワーポイントの活用方法など改善に努めている。ハイブリッドでは、PCや画面を投影するスクリーン、マイク内蔵の広角カメラといった設備をいかに上手く活用できるか摸索中である。カメラでホワイトボードを映すと反射して見づらい時は、Teamsのチャット機能を使用して板書を行う。教室での学生の発話をオンラインで聞き取りにくい場合は、そのつど私が復唱する。対面授業を進行しつつ遠隔の配慮を行うため、つねに並列思考が必要である。オンラインでは――とくに学生がカメラをオフにしていると――非言語コミュニケーションが成立しない。そのため指名して発言を促すといった時間も確保せねばならない。対面とオンラインを同時に行う新たな手法を見出していくことが求められる。離れていても一体感のある、そんな学びの場を学生と共に創っていきたいと願う。

「誰も置き去りにしない」――そう祈る思いで、心に誓いたい。

（岡野彩子）

5 「新しい生活様式」

厚生労働省は新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」の実践例を2020年5月に紹介した。一人ひとりの基本的感染対策、日常生活を営む上での基本的生活様式、買い物・娯楽、スポーツ等・公共交通機関の利用・食事・イベントなど各場面別の生活様式、働き方の新しいスタイルなどだ。だがどう新しいのだろう。一時的ではなく長期化を見据え、衛生や清潔の概念を集団そして個人の行動レベルに落とし込みたいのか。「三密」の回避ほか、厳しい行動規制を伴う。しかし「新しい」とまで言えるのか。非常時、人は混乱のまま行動するか、自ら考えず指示を待ち同調あるいは規範に従う。だが専門家の意見も分断しているので最終的には自己流に取捨選択するのが現状だろう。

看護職の後輩たちも同様だったので「正しく怖がろう!」と呼びかけつつ、東日本大震災の災害支援で避難所に呆然と立ち尽くした場面を思い出した。看護師は冷たい沢の水を汲み病院の床を拭き清め、清潔・不潔を分け環境を調えた。黙って被災者の肩を抱き脈をとり、お気持ちを調えていった。最新の機器はなくても素手の確かな看護があり、生命力を支える看護はできる。看護職はいつも看護の普遍性について考えているのだ。

ナイチンゲールによると看護は「自然が患者に働きかけるに最も良い状態に患者を置くこと」だ。病気は「毒されたり衰えたりする過程を癒そうとする自然の努力の現れでありそのときどきの結果」だ。健康とは「良い状態をさすだけでなく、われわれが持てる力を充分に活用できている状態」である。そして看護には「五つのものさし（指標）」がある。（1）生命の維持過程（回復過程）を促進する援助（2）生命体に害となる条件・状況をつくらない援助（3）生命力の消耗を最小にする援助（4）生命力の幅を広げていく援助（5）持てる力・健康な力を活用し高める援助だ。

例えば「風邪っぽい時の対処法」は「即受診」もあるが「眠る、安静にする」「温かいものや栄養をとる、体力をつける」「保温する」「嗽や歯磨き」「薬を飲む、生姜湯ほか薬湯を飲む」「便通を調える」など百人百様だ。体験からの傾向と対策を振り返り、体話（造語：心身のコミュニケーション）し、風邪の段階、条件下で各人が自由に何が有効か選択できる。結果は信頼に応えてくれる身体で、自分が主人公だと実感できる。だから3ヶ月毎に自分事として「生活様式」をチェックする。未病状態の今、これを「生活の様式」や「五つのものさし」の視点で見てゆく。「生活様式」ではものさし（1）（2）（3）が中心だが（4）（5）は免疫能を高め強化できる。看護を活かした日々の「生活様式」はひとの体力を維持、耐力を培い健やかに生き抜く力につながると考える。コロナ禍においても、このナイチンゲールの自然体の看護論が有効であることを日々私が確認していることは、言うまでもない。普遍的な原則はコロナ禍の「新しい生活様式」下においても有効である。

文献

金井一薫『ナイチンゲール看護論・入門』現代社、1993年。

（上條美代子）

6　コロナで揺らぐいのち――「命の選別」にどう向き合うか

コロナウィルス感染症の拡大で重症患者向けの病床が逼迫し、高齢で基礎疾患のある患者への人工呼吸器など救命装置の使用を断念せざるを得ない、という医師の衝撃的な証言が報道された。感染が激化するヨーロッパなどでも既に、治療の期待効果によって患者を振り分けるトリアージが行われているという。いわば究極の「命の選別」のひとつだが、社会が疫病に揺らぐこのような状況で、私たち一人ひとりが「いのちの重み」を今一度考えてみる必要があるだろう。

トリアージは「助かる見込み」が大きいかどうかで選別するが、実際にはより長く生きられるなど「助ける値打ち」があるかどうかとほとんど区別はできない。それは「役に立つ」かどうかで命を選別し、例えば障がい者を抹殺するような優生思想と根本的にはどこかでつながる危険性がある。大事故や災害でもトリアージが実施されているが、社会的にあまり問題にされないのは、国民全体にとって「明日はわが身」の心配が濃厚なコロナ禍と違い、どこか「よそ事」に見られるからだ。

しかし国による医療支援が不十分な状況では、現場で数少ない治療資源よりも重症患者が多くなれば、実際に「選択」を迫られる。そこでどうするか。「緊急避難」概念が援用されるが、それはやはり侵害される法益と守られる法益の比較均衡の発想だ。ここで哲学倫理学の「トロッコ問題」が想起される。暴走するトロッコの進路上に分岐ポイントがあり、片方の先には5人もう一方には1人の作業員がいる。ポイント操作でどちらを救い、どちらを犠牲にするかという問いだ。「ポイントをニュートラル状態にしてトロッコを脱線させ両方を救う」との回答はあくまで空想の世界だ。

現実のコロナ病床でいかなる選択があるのか。「命の価値」による選別ではなく、「その患者への思いの強さ」で選んでしまうかもという“究極の答え”が医師から吐露されることもある。選別の公的基準を示すべきだとの意見もあるが、それは「安楽死」論議と同様、個々の本人の意思を離れて「生きる価値」が少ないと見なされる人を切り捨てる“客観的線引き”になる危険性が大きい。現に「安楽死」を合法とする国では対象を終末期患者から高齢者、障がい者へ拡大する動きがある。

京都でALSの重症女性患者の嘱託殺人事件が明るみに出た後に、彼女をそこまで追い込んだ状況を問題視するのではなく、「安楽死法制化」を言い立てるような言説が流布されたことでも分かる通り、個別の人の苦悩に向き合わずに制度一般を振りかざすことの陥穽がそこにある。生命倫理研究者で重度心身障がいの長女がいる女性は「娘がもしコロナに感染したら『助けて』と意思表示さえできず、治療の価値がないと勝手に見なされて見捨てられるのではないでしょうか」と訴える。

元凶は“トロッコの暴走”を招いた日本の脆弱な医療体制、グローバル資本主義下で経済を優先し、巨額の軍事費を計上しながら医療福祉を削り続ける政策の犯罪的欠陥であり、まずこれを問題視すべきだ。その上で、選択に追い詰められる医療者、そして何よりも治療を受けられず諦めざるを得ない患者を出さないよう、その立場に思いを致すことが第一に求められているのではないか。

（北村敏泰）

7 言葉の力

「歴史上永遠の昔からこの世界に最も偉大な変革をもたらしたのは語られる言葉の魔力である」。こう語ったヒトラーは演説の名手であった。その演説に感動し熱狂した普通の市民=多数のドイツ国民が彼を独裁者の地位に押し上げた。それほど魅力的だった彼の演説の特徴は?

一つはワンフレーズである。「ドイツ人は偉大な民族だ」「支配民族だ」「ドイツは勝利する」。面倒な説明はない、単純な言葉を何度もくりかえす。常に敵を作りあげ、攻撃する。根拠などは不用、**嘘も100回言えば真実になる。**

その上、巧みなジェスチャーとともに叫ぶのは人が心の奥に押し込めている差別意識や傲慢さを解き放つ言葉である。「ユダヤ人は寄生動物である」「排除するしかない」。

ヒトラーに学んだとしか思えないのがトランプ前大統領である。ワンフレーズをくりかえし、デマを刷り込み、「議会に向かって行進を」「強くあれ」。その結果が暴徒によるアメリカ議会乱入。そのほとんどが白人であった。「不法移民が麻薬を持ち込む」「国境に壁を作る」。トランプの言葉がヘイト意識を解き放ったのだ。

扇情的な言葉は恐ろしいが、政治家にとって言葉は大切である。

2回目の緊急事態宣言の記者会見で菅首相は下を向いて原稿を読み上げた。言葉には感情がこもっていない。表情も終始硬い。そのうえ、言い間違える、質問にまともに答えない。

思えば首相の官房長時代の決まり文句は「指摘は当たらない」「お答する必要を感じない」だった。首相になっても学術会議問題などで同様な発言を繰り返した。政治家なのに演説が下手との定評があるそうで、もともと彼は自分の「言葉」をもたない人なのだ。そのうえ、緊急事態宣言は首相自身の決断ではなく、知事たちや専門家に迫られてやむなく出したものらしい。「GOTOキャンペーンや五輪の邪魔になる宣言は出したくない」のが本心。内面が透けて見える空疎な言葉で語られた宣言が国民の心に響くはずがない……

対照的なのはドイツのメルケル首相である。昨年3月の国民向けスピーチでは「自由の制限」を強いることの心苦しさを滲ませつつ、丁寧な説明と共に、自粛を求めた。終始前を向き、口調はあくまで物静かであった。12月の議会演説では一転、目に涙をうかべ「今年のクリスマスを我慢すれば、来年はおじいちゃんやおばあちゃんと皆でクリスマスが祝えるかもしれない。でも我慢しなければ、最後のクリスマスになるでしょう」と訴えている。内面から発せられる言葉、心のこもった言葉、相手の状況を思いやって語られる言葉こそが人の心に届く。これが本当の言葉の力である。

この危機の時期、国民に語りかけることさえできないこの首相に政治を任せてよいのだろうか。

（熊野以素）

8　抱きしめる――コロナのなかで看取るということ

父が帰天してから1ヶ月が経過した。6ヶ月ほどの闘病生活を共に過ごしてきたが、その間コロナという疫病は私と父のあいだに大きな障害となった。父がまだ動け、元気だった頃は、自宅療養をしていたので、好きなだけ会話をし、彼の体をさすり、家族や知人などを招いて比較的賑やかなひと時を持つことができた。そのころは、父の眼に力があり、まさか病魔がそこまで身体を蝕んでいるとは想像もできなかった。

自宅での闘病生活が無理だと診断され、入院を余儀無くされてからは、旧知の病院だったこともあり、特別に1週間に1度、10分ほど面会を許されるようになった。その際も父は、家族や仕事のことを心配し、逆に励ましを与えてくれた。しかし、私は彼に触れることは許されなかった。手を握りたい、浮腫んだ足をマッサージしたい、と願ったが、コロナを理由に医師や看護師たちに見守られている状態の面会だったので、それはできなかった。

病状が悪化し、譫妄状態となっても、この短い面会は許されていたが、彼の温もりを感じることができなかった。私は少しでも父の大きな胸（その時にはもう、小さくなっていたが）に頭を乗せていたかった。

年の暮れの真夜中に電話が鳴り、血圧が大分低いので急遽来院するようにとのこと。遠く離れた病院に入院していた父へ会いに始発で向かい、何とかまだ息のある、父に会うことができた。その際、医者、看護師さんには止められたが、父を抱きしめたい思いという勢いで抱きしめた。その際には、血圧が下がり続けるばかりであったが、医者たちもその意味について教えてくれず、親戚の医者へ電話をしても、無言であり、切なさを感じた。思い余って夜中に友人の看護師の方に連絡したところ、「きっと、ゆっくりと息を引き取られるかもしれないでしょうから、あなたがしてあげたいことを、して差し上げて下さいね」との心強いお言葉を頂き、父が好んで私が歌うのを聴いていた、プッチーニの1幕オペラ『ジャンニ・スキッキ』中の“*O mio babbino caro*”（私の大好きなお父さん）を大きな声で何度も歌い、抱きしめ、彼が天に召されるまで一緒に過ごすことができた。

コロナ禍の中での看病、看取りは想像以上に辛苦に包まれていたが、家族、友人、大学の上司、または見知らぬ方にまでお力を頂いた。私はできる限りの愛を父にそそぎ、本来触れてはならないのに、抱きしめて、帰天させたことに、悲哀のなかに少し温かいものを感じる。この私の経験が独りよがりの述懐にならず、全く同じではないにも関わらず類似の離別の経験をした多くの人たちにとって、自分自身のトラウマを再演するためにではなく、受苦の共有を通して、反省的に、その苦悩からの克服のためになることを祈りつつ、この文書を閉じたい。

（滝奈々子）

9 コロナ時代にコスタリカの「世直し人」を想う

2021年を迎えて間もなくのある夜、ベッドサイドのスマートフォンが一通のメールを受信した。アメリカ合衆国に暮らす友人から届いたそのメールには、「電話番号を教えてくれる? WhatsAppは使ってるよね? あなたにメッセージを送りたいんだけど」と書いてあった。翌朝、同アプリに届いていたヴォイスメッセージで、わたしはコスタリカの恩師の突然の訃報を知った。

マルコス・ゲバラ(Marcos Guevara Berger)氏は、コスタリカのインディヘナ(先住民)研究で知られる人類学者だった。わたしがまだ学部生の頃、留学生として来日していた彼の教え子を介してその名を知り、その後メールでのやり取りをさせてもらうようになった。フィールドワークのためわたしがコスタリカを年に数回程度訪れるようになって以降は、たびたび対面で会う時間をつくり、またコスタリカ国内外の研究者や実務家と知り合う機会も与えてくれた。その彼が何十年にもわたって取り組んでいたのが、インディヘナの人びとの権利回復運動である。コスタリカ総人口の約2.4パーセントを占めるといわれるインディヘナの人びとは、コロンブスの「新大陸発見」から今日にいたるまでの500年以上もの間、さまざまなかたちであらわれる差別や抑圧のなかを生き抜いてきた集団/個人である。近年とくに先鋭化しているのは、コスタリカ国内24か所に存在する先住民居住区と呼ばれる土地をめぐる地域紛争や小競り合い(コンフリクト)である。1970年代に施行された法律には、先住民居住区として境界線が引かれた土地の所有権は「先住民コミュニティ」へ返還されるべしという条項や、「インディヘナである」という条件を満たさない者が同法律施行以降に土地購入等を行うことを禁止する条項が明記された。しかし、実際にはいずれも遵守されてこなかった。また、同法律の想定する「先住民コミュニティ」や「インディヘナである」ことの解釈をめぐっての論争も生じた。さらに、未返還の土地の権利回復を求めて運動していたインディヘナの活動家2名が2019年と2020年にそれぞれ何者かによって殺害されるという事件も発生した。ゲバラ氏は、あるときは専門家証人(expert witness)のような立場で各種裁判に関わり、人類学的な知見から土地所有等に関する証言を行ってきた。またあるときは一人の人権活動家として、インディヘナの人びとが直面してきた/いる諸問題についてメディアをとおしてより多くの人びとへ訴えかけてもいた。

マルコス先生とライブで対面し言葉を交わすことはもう叶わない。お別れの会にもリモートでしか参列できない。しかし、SNS上に残された、いつかの彼がそのときどきに投稿したコメントや画像、映像、そして彼自身の、また彼が聞いた/聞こうとした複数の声を非ライブ、リモートで受け取ることはできる。日本の「世直し」の先達が手書きで残した膨大な日記や書簡からの語りかけを受けるように、マルコス先生のアカウントのなかに溢れる断片的な、ときに落胆しときに奮起するヴォイスを受け取ることで、彼との画面越しの交流をこれからも続けていこう。

(額田有美)

10 記憶を継ぐ者の責務

高齢であった祖父が亡くなり、半年が過ぎようとしている。私の記憶の中では、夏休みに訪ねるといつも温かく出迎えてくれた優しく穏やかな祖父であった。彼は19歳の頃、日本陸軍の一兵卒として徴兵されて南方戦線に出征し、何度も死線を掻い潜った話を私は幼い頃から聞いてきた。

中でも、台湾でマラリアに罹患して死の淵に立たされた話は印象的であった。高熱で朦朧とした意識の中で、上官が枕元で自分の名前を呼び掛ける声に加えて、軍医の「こいつはもうだめだ」と言う声を祖父は覚えていた。幸いにも軍から薬を支給されていたが、死が近いと悟り「死ぬ前に旨い物が食べたい」と現地民の家を訪ねて、半分残した薬と交換に、野菜とバナナを食べさせてもらえた。それが契機で体力が回復し、祖父は再び日本の土を踏めたのである。

思い返せば、少年時代は男女問わず祖父母の戦争経験を直接聞く機会があった。小学校で使用した社会科の教科書には、児童たちに囲まれて戦争を語る老夫婦の挿絵が掲載されていたと記憶するが、その光景は当時としては何も珍しくなかった。だが時が経つにつれ、現在の若い世代にとって戦争経験談は曾祖父母が語る話へと移り変わり、曾祖父母がいなければ、次は教科書などの書籍やウェブ情報等で知ることになり、過去にいた誰かの出来事に変わりつつある。こうした時の流れを私は身にしみて感じている。「NHK戦争証言アーカイブス」では、あらゆる人々の貴重な戦争証言が公開されており一見の価値があるが、当コンテンツに限らず、より多くの戦争証言を早期から収集して体系的に公開する事業が従来少なかったことは、一つの社会的損失ではないかと思わせる。

経験を経た者とは、経験を記憶した者でもある。祖父が語った記憶は、私たち子孫に引き継がれた記憶であり、私たちの中で生き続けていく記憶として、これからも大切にしてゆかなければならない。それは祖父が生きてきたからこそ、私たちはこうしてこの世に生を受けられたからである。そのことに最大限の感謝をするのみならず、記憶を継ぐ者としての責務が生じていると自覚する。

2021年とは、わが国において敗戦から76年を数える年である。それは敗戦以降、小規模な戦禍にさえ見舞われることなく平和を享受できた歳月を表す。だが、すでに東アジア情勢は米中対立、中国の南沙諸島への領土拡大および国境侵犯等、戦争の火種が燻っている状況下にある。私たちのように戦争を経験しない世代は、かつての戦争の記憶を継ぐ者であると同時に、将来起こり得る戦争の可能性と向き合いながら、国を守る意志を携えた者として現実に向き合う必要がある。それは戦死者たちと戦争犠牲者たちが必死で守り、生きようとしても叶わなかった望郷の先にある国土を、守り続ける責務が生じていることをも意味する。いつまでも彼らを偲べる世の中を維持できるよう、さらに新たな犠牲者が出ないよう、時にはそれぞれの立場を超え、未来を守る声をこれからも次世代に届けなければならない。

（日髙悠登）

（投稿日：2021年1月31日）
（受理日：2021年5月31日）